

序 (2)

(続き)

他方、著者が本書で示す立場や提言する解決策について、それらは単に「象牙の塔 (ivory tower)」の一教授が頭で捻り出した理想主義的考えにしかすぎず、我々の教会が「最前線 (front lines)」で抱える現実の諸問題や必要からは全くかけ離れている、と感じる人たちもいるかもしれない。これは一面 当たっているが、と同時に、著者が思うには、誤りもある。著者はキリスト教教育の教員として、諸教会の問題や必要に数多く触れてきたし、自身が教会で実際に関わったことも少なくないからである。また、著者の主たる務めは教会そのものにおけるものではなく、ある意味で、その多くはたしかに「塔」の中でなされた、と言えるかもしれない。しかし、我々の信仰的情况を見晴らす位置としては、これは悪いものではなかろう。というのも、「前線」の人々は往々にして、目の前の必要に気を取られるあまり、長期的視点に立って戦闘場面の全体を見ることができなくなるからである。人は最前線にあると、その時々目の前の状況に迫られるため、長期的結果を適切に認識せずに決断したくなるし、行動の方針を決めたくもなる。そのような場合、事柄を混同し、本来の事態と思ひ込みのそれとを取り違えがちになる。これからも分かるように、塔から事を見渡すことには間違いなく意味があり、それは重要な貢献をなすことだろう。

さらには、キリスト教教育⁽⁸⁾を本務とする著者がなぜ 前述のような面倒な神学的諸問題に取り組もうと考えたのか、不思議に思われる人々もいるかもしれない。答えはしごく単純である。著者はキリスト教教育に携わる者として 福音を伝える形式やプログラム、手法に関心を持っているが、その一方で同時に、そうした手段を通して伝えられているものが実際に正しい福音⁽⁹⁾なのか、確認したいからである。キリスト教教育の関係者はそもそも、こうした理由から常に、神学に深い関心を寄せていなければならぬ。

〔本書を著すにあたっては〕以上のような分野を著者と共にセミナーで探求してきた学生たちに負うところが小さくなかったことを、謝意を付して記しておきたい。鋭い質問や鋭敏な洞察力をもって、彼らのほうが著者の教師となることもしばしばだった。友人らも幾人かが初回の草稿に目を通し、建設的な批評をくれたほか、執筆作業を続けるよう励ましてくれた。主な友人を挙げると、アーネスト・J. レスナー (Ernest J. Loessner)、ロバート・A. プロクター (Robert A. Proctor)、C. ペンローズ・セント・アマン (C. Penrose St. Amant)、J. レオ・ギャレット (J. Leo Garrett)、W. W. アダムズ (W. W. Adams) —サザンバプテスト神学校—、ケネス・L. チャフィン (Kenneth L. Chafin) —サウスウエスタンバプテスト神学校—、ブルックス・ラムジー (Brooks Ramsey) —ジョージア州オールバニー 第一バプテスト教会—、エリス・ブッシュ (Ellis Bush) —バプテスト日曜学校局—、ランドルフ・C. ミラー (Randolph C. Miller) —イェール大学神学院—、G. キャンベル・ワイコフ (G. Campbell Wyckoff) —プリンストン神学校—、ドナルド・M. メイナード

(Donald M. Maynard) —ボストン大学神学院—といった人たちである。これらの友人すべてに、心からの謝意を表したい。加えて、同僚二人の名前も特記せずにはおれない。アレン・W. グレーブズ (Allen W. Graves) とウィリアム・E. ハル (William E. Hull) の二人で、ふたりは最終原稿を読んで、有益な示唆を数々寄せてくれた。彼らの助力に深く感謝をしている。さらには、バジェット・ディラード (Badgett Dillard) とクララ・マッカート (Clara McCartt) が文体や書式について貴重な協力をしてくれ、グレン・ヒンソン夫人 (Mrs. Glenn Hinson) ⁽¹⁰⁾ には最終稿のタイプをしていただいた。三人にも感謝である。最後に、妻のルーヴィーニア・リトルトン・エッジ (Louvenia Littleton Edge) と二人の息子、ラリー (Larry) とホイト (Hoyt) に感謝の意を伝えたい。本書に記した懸念と期待のいずれについても、彼らは著者と思いを共にしてくれている。

ケンタッキー州ルイヴィルにて

フィンドリー・B. エッジ (Findley B. Edge)

注

1. Karl Heim, *Christian Faith and Natural Science* (New York: Harper & Bro., 1953) 24.

訳注

(1) 原著初版本の執筆は 1963 年で、ここで言う「今日」^{こんにち}とはその頃のこと。第二次大戦後の当時、南部バプテストの諸教会は破竹の勢いで 教勢を拡大していた。

(2) ドイツのプロテスタント神学者。1874～1958 年。ルター派の敬虔主義^{けいけんしゅぎ}的立場から、現代思想を論じた。反ナチズムの堅持者としても知られる。

(3) [] 書きは、訳者の補筆挿入。

(4) 以下、「いつの時にも付きものの」および「しかしながら、我々の目下^{もっか}の欠陥が単に小さな病弊なのか」「いかにしたらそれが言えるであろうか」は、原著からの補記訳出 (改訂版抜け落ち)。

(5) "priesthood" にはしばしば「祭司制」という訳語が当てられるが、これは誤りで、正しくは「祭司性」。すなわち、ここでの文脈に即して言うなら、信仰者誰もが制度や職分としての祭司であるということではなく、信仰者であれば誰であれ、そこにはそもそも祭司的な特性や特質が伴う、という意味。

(6) よく知られたこの一節はエフェソ 2:8 にあるものだが、新共同訳聖書では「恵みにより、信仰によって」、口語訳聖書では「恵みにより、信仰による」、そして文語訳聖書では「恩恵^{めぐみ}により、信仰によりて」と訳出されている。ちなみに、原語のギリシア語ではそれぞれ、"τῆ^テ χάριτι^{(イ)カリテイ}" "διὰ^{ディア} πίστεως^{ピステオース}"となっている。ここでは、翻訳原著の英文に従い、直訳的に訳出している。

(7) ヤコブ 1:26。

(8) 傍点は、訳者の追加。

(9) 傍点は訳者の変更表記で、原文はイタリック（斜体）で強調。

(10) 本名はマーサ・ヒンソン（Martha Hinson）。「グレン」は夫の名で、ここでは本書執筆当時の慣習に倣い、夫の姓名に "Mrs." を付して 妻の表記としている。ちなみに、グレン・ヒンソンは教会史の著名な学者で、本書執筆時、著者と同じくサザンバプテスト神学校で教鞭きょうべんを執っていた。

（矢野 眞実訳）